

第1章：経済学の基本原理

M 第1, 2, 3章

経済学における二大重要視点

- 意思決定 (**Decision Making**) : 個人
- 相互依存 (**Interdependence**) : 社会

1.1. 意思決定

意思決定を理解するための5大原理

- トレードオフ
- 機会費用
- 合理的個人
- 限界原理
- インセンティブ

1.1.1. トレードオフ

経済主体は様々なトレードオフに直面する

- 予算制約： バナナを買うか、みかんを買うか
- 生産可能性フロンティア： バナナを作るか、みかんを作るか
- 環境保護か、経済成長か

- ・ 「公平」と「効率」のトレードオフ

例： Aさんの所得は1億円、Bさんは500万円

→ 不公平

→ 4000万円の所得移転で不公平是正

→ Aさん6000万円、Bさん4500万円

→ AもBも勤労意欲失う： 「働いても税金とられる」
「働かなくてもお金もらえる」

→ 非効率

1.1.2. 機会費用 (Opportunity Cost)

会計上のコストと「機会費用 (経済学的なコスト)」を区別せよ！

例：大学進学のコスト：

会計上のコスト： 学費、生活費など実際にかかる費用
機会費用： 大学に行くことによって失われるチャンス

大学に行かないで就職すると

500万稼げる： 機会費用に含めよ

大学に行かないで専門学校にいくと

就学コストかかる： 差額などが機会費用に

1.1.3. 合理的個人

経済主体を「合理的に選択する主体」ととらえるアプローチ

消費者： 効用最大化：予算制約下で効用（満足）を最大化

生産者： 利潤最大化：生産技術制約下で利潤（株価）を最大化

事実解明的メリット： 経済主体の行動を予測するのに都合がいい

規範的メリット： 「よりよい決定はなにか」を考察するのに都合がいい

行動経済学： 経済主体は単純には合理的個人として説明できない
限定合理性、心理的バイアス

倫理的、向社会的動機：
経済主体の動機は単純な利己心だけではない
利他心、互惠性、正直、責任感
エシカル消費者、エシカル労働者、エシカル投資家

1.1.4. 限界原理

合理的経済主体は
選択の限界的な変更によって利益が限界的に高まるかを考え
少しずつ調整しながら最適化を探る（差分最適化）

例：プロジェクト A、プロジェクト B、プロジェクト C

水準最適化： 各プロジェクトについて利潤を計算し一番大きい利潤のプロジェクト（ここでは **B** とする）を選択

差分最適化： まず **A** と **B** を比較して、内容の違い（**A** の方が人件費高いなど）から利潤の差を割り出す → **B** の方がいい
次に **B** と **C** を比較して、内容の違い（**C** の方が光熱費高いなど）から利潤の差を割り出す → **B** がベスト！

1.1.5. インセンティブ

インセンティブ（経済主体の行動をうながす要因）
を解き明かすことは
ミクロ経済学の特に大事な使命である

- バナナの価格アップ → バナナを買うインセンティブ下がる
- ガソリン税アップ → 車から公共交通手段へ
HV、EV 生産へ
- シートベルト着用義務化 → 自動車事故死ダウン
自動車事故件数アップ

インセンティブの連鎖（意思決定から相互依存へ）

例：ケニアの虫下し：

高額の開発援助をしてもケニアは貧困から抜け出られない
どうしたらいいか？

Michael Kremer et al. (2004)

虫下し薬（安い）を各家庭に配布
⇒ ケニアの教育水準に大きな効果

Why? : 学校は病気感染の巣窟だった
「朝虫下しして登校する」ようになって状況改善
学校で感染しなくなる
⇒ みんな学校に行くようになる
⇒ 教育水準アップ ⇒ 経済発展へ期待

1.2. 相互依存

相互依存を理解するための3大原理

- 取引
- 市場メカニズム
- 政府の役割

1.2.1. 取引

取引は売り手買い手双方にメリットもたらす

純粹交換：

- A さん「バナナ持っているがリンゴ好き」
- B さん「リンゴ持っているがバナナ好き」
- A と B が交換することで双方の効用アップ
(欲望の二重一致)

貨幣的交換：

- A さん「バナナ持ってないがリンゴ好き」
- B さん「リンゴ持っているがバナナ好き」
- C さん「バナナ持っているがリンゴ嫌い」
- (欲望の二重一致不成立)
- まず A さんは B さんからリンゴをお金で買う。
- B さんはリンゴの代金で C さんからバナナを買う

国際貿易：比較優位原理

開発国が自動車を生産、先進国が農産物を生産する例

A 国（開発国）人口 1 万人：

自動車： 40 人で 1 台生産

小麦： 60 人で 1 袋生産

100 台、100 袋

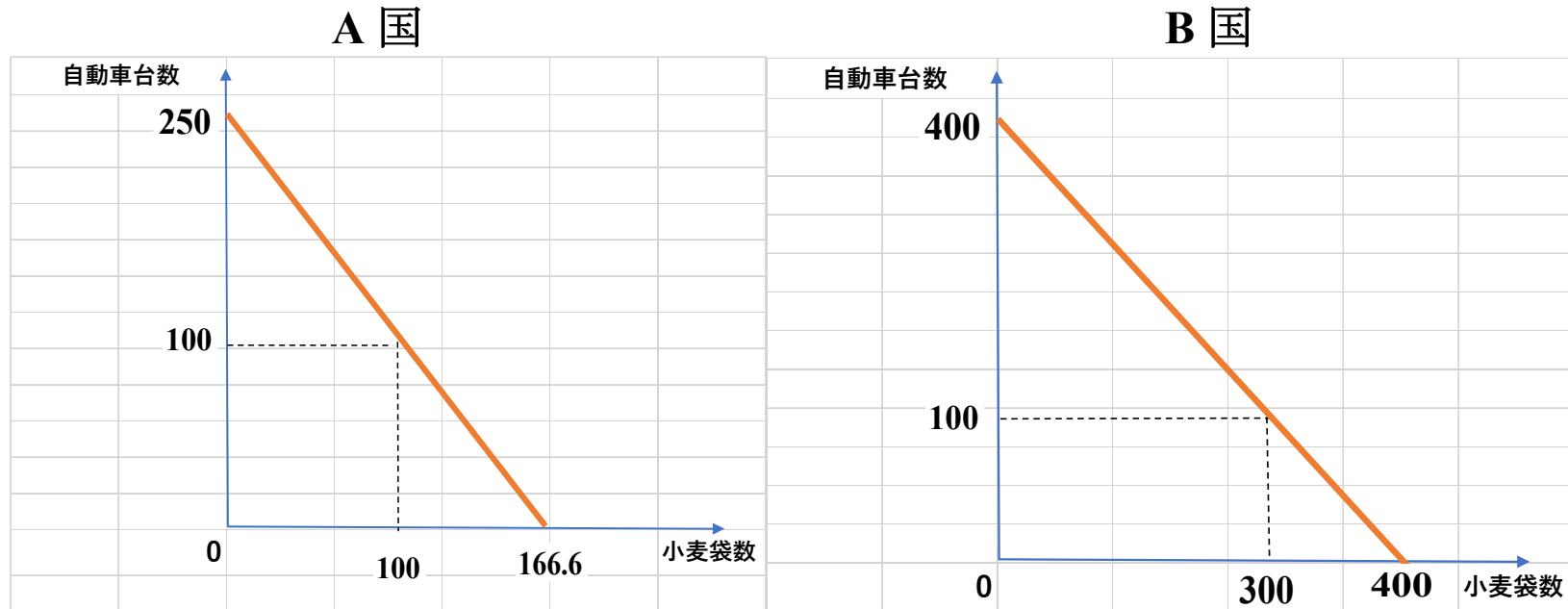
B 国（先進国）人口 1 万人：

自動車： 25 (<40) 人で 1 台生産

小麦： 25 (<60) 人で 1 袋生産

100 台、300 袋

生産可能性フロンティア



A 国は B 国に自動車、小麦どちらについても**絶対劣位**、しかし

A 国は B 国に自動車について**比較優位**： $\frac{40}{60} = \frac{2}{3} < 1 = \frac{25}{25}$

特化 (Specialization) : 貿易自由化すると…

A 国は自動車に特化：**250** 台生産： A に **125** (>100) 台、B に **125** (>100) 台
 B 国は小麦に特化：**400** 袋生産： A に **100** (=100) 袋、B に **300** (=300) 袋

1.2.2. 市場メカニズム

市場（競争市場）

効率性の達成のためのすぐれた制度（メカニズム）

資本主義経済システム

- 分権的決定： 各経済主体は主に利己的動機にしたがって
消費や生産を決定
価格メカニズム：「見えざる手」アダムスミス
- cf. 中央集権的決定： 官僚が財や資源の配分全体を一括して決定

例：マスクの転売規制、上限価格規制

ほとんどの経済学者の見解： 「まちがった政策だ」
 メディアと政府： 「社会通念上転売は好ましくない」

A さん： マスク 1 枚に 1000 円払う気がある

B さん： マスクに 100 円以上は払いたくない

経済学者： A の方がマスクを欲しがっているので A にあげるべきでは？

A さんは富裕層： 既にマスクを少し持っている

B さんは貧困層： マスクを持っていない

一般常識： B にマスクを使ってもらうべきでは？

A にあげるのは倫理的に問題（不公平、**unjust**）では？

経済学への批判： 「経済学は効率性と公正（厚生）を同一視しているのでは？」
 ジェイン・ジェイコブズ「アメリカ：大都市の死と生」1961
 映画「ニューヨーク都市計画革命」
<https://www.youtube.com/watch?v=1Yvp45aRBs8>

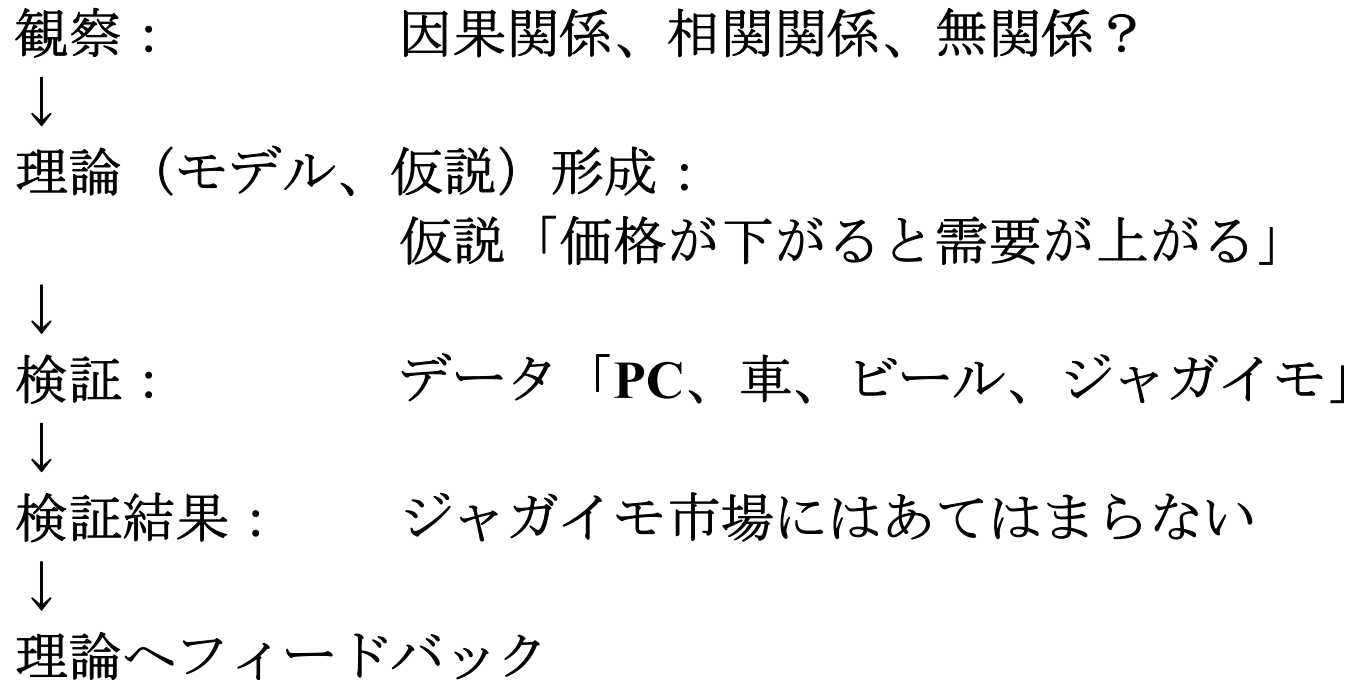
1. 2. 3. 政府の役割

- 所有権の保護
- 「市場の失敗」の是正：
 - 市場にゆだねてはうまくいかないケースもたくさんある：
 - 市場支配力（独占、寡占）の発生
 - 外部性、公共財、コモンズ
- 不公平の是正

資本主義経済における政府の役割は大きい
しかしうまく機能しないことが多い
政治に「見えざる手」は働かない

1.3. 理論と検証

経済学の科学的方法論



データ： 実験経済学： 昔「経済学は実験できない学問である」
今「実験デザインはアートである」

偶然的現実データ
歴史的な非人為的実験

理論： 数理モデル、ゲーム理論
現実を単純化することで本質を浮き彫りにする
現実の詳細な記述では理論とイえない
経済学のための「言語」や「カルチャー」をつくっていく
→ 未知の経済問題に対して予測力をたかめていく
「経済学はアートである」

1. 4. Evidence-Based (EB) Economics

観察における留意点
因果関係か？相関関係か？無関係か？

例： 糖尿病と自動車と中国経済：

「糖尿病患者がここ数年急増している」

「自動車運転人口がここ数年急増している」

「中国経済がここ数年急成長している」

EB の例：中絶の経済学的帰結

ルーマニア革命（1989）



独裁者ニコラエ・チャウシェスク（～1989）

公開処刑 Why?

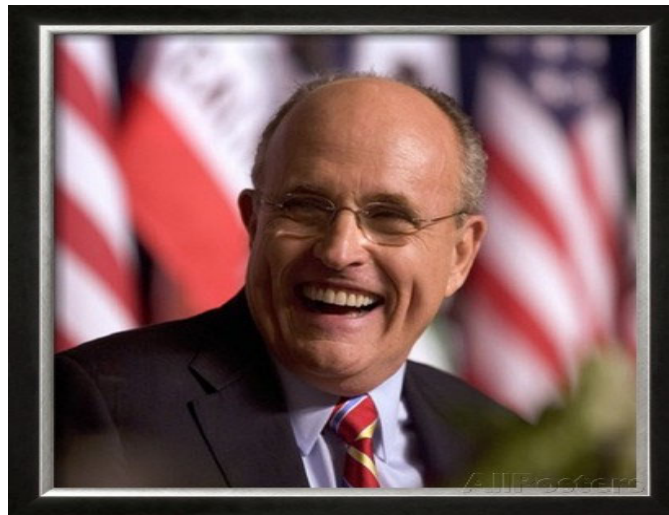
1960年代後半より中絶禁止「生めよ、増やせよ」
チャウシェスクの落とし子（1966～）



20年後チャウシェスクの落とし子が
チャウシェスクを公開処刑した！

一方、アメリカ（1990年代）では
大都市における急激な犯罪件数の低下

ルドルフ・ジュリアーニ市長（New York）：「世界の市長」



「膨大な公共支出による警備強化の賜物」とメディアが評価
しかし、他の大都市も犯罪率下がっている Why?

犯罪率が激減した「本当の理由」はなにか突き止めよう！

Levitt and Donohue 「ヤバい経済学」(東洋経済)
チャウシェスク事件 (1989) からヒントを得る

1973年「ロー VS ウェイド事件」: 「堕胎禁止は違憲」判決

⇒ 母親は中絶を選択するようになった

⇒ 孤児が激減

⇒ **1990代(20年後)大都市で犯罪率激減**

チャウシェスク事件の裏返しだ！

Levitt らによる計量経済学的分析結果:

膨大な公共支出と犯罪率低下の間に「因果関係」はなかった
税金の無駄使いだった

1.5. 政策のアドバイス

- 為政者は経済学の影響を強く受けている（良い悪いは別として）
- 経済学者は時として意見がことなる：
 - 前提とするモデルがことなる
 - 価値判断がことなる
- 為政者は「自分の（独善的な）政策の裏付け」に経済学を利用していることがある：
 - 御用学者の徴用

- 経済学者の専門的な見解は「社会通念に反する」、「タブー視される」ことが多い：
 - 転売、臓器移植、入札、上限下限価格規制、消費税軽減税率、奢侈税
- 経済学者側にも問題があることがある：
 - 効率性過度に重視、公平性を楽観視
 - 「効率と公平のトレードオフ」を忘れがち
 - 貧困問題を忘れがち
- 一部の（卓越した）経済学者の傾向：
 - 主権者保護からリバタリアンパターナリズムへ
 - 行動経済学的政策

宿題（1）を提出すること

宿題のダウンロードおよび提出は「**ITC-LMS**」にアクセス